

マイノリティをめぐる「語彙」と「文脈」

芝正夫と「福子」

山田巖子

Vocabulary and Context of Minorities : Masao Shiba and Fukuzo

YAMADA Isuko

はじめに

- ①「福子の伝承」の発想
 - ②「福子の伝承」の生成
 - ③芝正夫の戦略
 - ④「福子」をめぐる文脈
 - ⑤「宝子」をめぐる文脈
 - ⑥「福虫」をめぐる文脈
- まとめにかえて

【論文要旨】

「障害」をもつ子どもが、家に福をもたらずという、いわゆる「福子」「宝子」の「伝承」は、大野智也・芝正夫によつて、民俗学の議論の俎上に載せられた。この「伝承」は、この著作以前には、ほとんど記述されていない「伝承」であった。そのため、一九八八年の国際障害者年を契機として、新たに「語り直された」「民俗」であるという批判があった。筆者は、まさに「民俗と世相——鳥語なるもの」をめぐつて——と題する小稿の中で、このことばの「読み替え」は、「障害」を持つとされる「子ども」の保護者の間で、一九七〇年頃には既に起こっていたこと、問われるべきは、このようなことばが「伝承」として可視化され、語るに足るものとして捉えられるという、認識上の変化・変質の方ではないかと論じた。

本稿では、この問題の残された課題について検討した。まず、この本の作者の一人、芝正夫という人の研究の背景について示した。東洋大学で民俗学研究会に属し、卒業後、障害者福祉関係の仕事に就いていた芝は、「障害」を持つ子どもの親の手記から「福子」「宝子」

ということばを知り、このことばのマイナスの語義を知りつつも、「障害」を持つ人々が地域に当たり前に暮らすことを可能にすることはとして、再生させようとした。その結果、このことばを「昔の人の知恵」「伝承」として、人々に提示してみせた。

次に「障害者」としてラベリングされる以前に、「福子」や「宝子」ということばが、どのような文脈に置かれたことばだったのかを考察した。「障害者」という概念のもとに、集まつてきたことばが、「愚か者」「役に立たない者」「家から独立できない者」という語義を持つことばであったことを示し、「障害者」とは別種のカテゴリーであったことを示した。

これらのことを明らかにすることで、①「伝承」や「民俗」という枠組みを、目的のために戦略的に使う人物（芝正夫）が民俗学的「知識」の形成に関与したこと、②「障害者」をめぐる認識のかわりめにあつて、過去の別種のカテゴリーにあつたことばが、かつての文脈を失つて再文脈化したこと、を示した。

【キーワード】 語彙、福子、障害者、単身者、マイノリティ、再文脈化